

シチリア島・パレルモにおけるフェニキア時代の遺構について －2017 年 8 月の調査から－

**Study of Punic Sites in Palermo in Sicily, Italy:
Results of the Research Trip in August, 2017**

小 方 登
Noboru OGATA

本稿では、イタリア・シチリア島のパレルモを事例として、フェニキア・カルタゴ植民都市の立地と形態を検討する。フェニキア本土（レバノン）の都市やフェニキア・カルタゴ植民都市には、その立地に共通する特徴があり、それは「海岸沿いの岬の先端や小島」であるとされる。ここではパレルモ大聖堂司教館中庭のフェニキア時代遺構を手がかりに、古代パレルモのプランの復原を試みた。あわせて衛星観測による地形データに基づき、古代パレルモが2つの川の河口にはさまれた半島状の台地に立地していることを示し、その立地がフェニキア・カルタゴ植民都市の多くの事例と整合することを論じた。

キーワード：歴史的都市、フェニキア・カルタゴ文化、パレルモ、シチリア島、イタリア

Key Words：Historical town, Phoenician and Punic culture, Palermo, Sicily Island, Italy

Ⅰ はじめに

フェニキア人は、北西セム語系に属する古代オリエントの民で、紀元前2千年紀に現在のレバノンやシリアの地中海沿岸に定住した。レバノン山脈の杉材を用いて船を造り、地中海沿岸で海上取引に従事し、海港都市を作った。統一国家は作らず、ビュブロス、シドン、テュロスなどの都市国家として活動した。地中海取引の進展にともない、地中海沿岸の各地に寄港地を作り、それらは植民都市として発展していった。植民都市の中でも、今日のチュニジアにあったカルタゴは特に有力で、「帝国」を形成するようになった。一方でギリシアも地中海取引と地中海沿岸の植民に熱心で、イタリアのシチリア島にも、コリントス人がシュラクサイ（シラクーサ）を作ったのをは

じめとして、ギリシア植民都市が作られるようになった。フェニキア・カルタゴ勢力とギリシア勢力は、シチリア島で互いに接するようになった。

紀元前 480 年、ペルシア帝国海軍とギリシア海軍との間で戦われた「サラミスの海戦」と同日、シチリア島のヒメラでシュラクサイを中心とするギリシア系ポリス連合軍とカルタゴとの間で、「ヒメラの戦い」があったと、ヘロドトスは伝える（松平千秋訳，下 124-125 頁）。このころからポエニ戦争でカルタゴがローマに敗れるまで、シチリア島はギリシア勢力とフェニキア・カルタゴ勢力との争奪戦の舞台であった。シチリア島には強勢を誇ったシュラクサイをはじめ、アクラガス（アグリジェント）やセリヌス（セリヌンテ）など古代ギリシア都市の遺構が今もあり、ギリシア神殿などを見ることができる。他方、島の西部はカルタゴに近いこともあり、長くフェニキア・カルタゴの勢力圏であり、都市としてはパノルモス（パレルモ）やモテュアがあった。

本稿ではパレルモに残されたフェニキア時代の遺構を紹介し、古代フェニキア都市としての立地および形態を論じる。筆者は 2017 年 8 月の 21 日から 30 日にかけて、イタリアを訪れ、主にシチリア島の都市遺跡を調査した。主な目的地は、パレルモ、モテュア、マルサーラ（リリュバエオン）、セリヌンテ、アグリジェント、シラクサである。

II パレルモのフェニキア時代の遺構

パレルモは、8 月 23 日に調査した。パレルモの広い範囲の概観を図 1 に示す。シチリア州立考古学博物館を見学した後、ノルマン王宮を訪れた。王宮の地下には、ポエニ時代の構造物の石組みがあり、見学した。また、ポエニ時代のネクロポリス（共同墓地）を訪れた。そこでは、羨道のある地下墳墓が密集して見られた。このネクロポリス遺跡において掲示されていた説明板には、古代パレルモの復原図や説明があり、非常に参考になった。

さらに、パレルモのカテドラーレ（大聖堂）西隣にある司教館の中庭に、フェニキア時代の道路および建物の遺構があり、見学した（図 2・3）。この遺構の配置を WorldView-3 衛星画像（2017 年 4 月 11 日撮影）を利用して検討すると、以下の通りとなる（図 4）。図中、東北東から西南西に向かいまっすぐ走る街路（A'-B'）は、今日のパレルモのメインストリートであるが（図 1 中の A-B）、フェニキア時代においても主要街路であった可能性が高い。そして、図 4 中の C-D は、それに直交するように計画的に配置された街路であろう。司教館の遺構は、C-D 街路の延長であったといえるのではなかろうか。この遺構には、道路の側溝のようなものが観察された（図 3）。

シチリア島・パレルモにおけるフェニキア時代の遺構について（小方 登）

また、ピア・アンド・ラブル法による建築とみられるものも観察された（図2）。ピア・アンド・ラブル法（'pier-and-rubble' technique）は、大きく細長い直方体の石材を柱のように用い、それらの間を小さな石材で充填して壁とする工法であり、フェニキア本国（レバノン）にその起源があるとされる（マーコウ 2007, p. 104-105）。この種の建築を、筆者は2009年11月のチュニジアにおける調査で、カルタゴのビュルサの丘の遺跡（図5）やチュブルボ・マジウス遺跡（図6）において実見した。

III 地形モデルで見る古代都市パレルモの立地

歴史的都市としてのパレルモの立地を地形から検討したい。日本が運用している地球観測衛星「だいち」の観測に基づく地形データ（デジタル標高モデル:DEM）として、ALOS World 3D - 30m（AW3D30）が無料で利用できるようになった。パレルモの地形を標高の濃淡で示したのが、図7である。パレルモの歴史的な核は、北のパピレト川、南のケモニア川にはさまれた、半島状の台地であった。この台地をまっすぐに貫いていたのが、図1中のA-Bの街路（図4中のA'-B'）であり、この街路およびこれと直交するいくつかの街路の周辺に歴史的都市としてのパレルモが形成されたと考えられるだろう。

先述のネクロポリス遺跡の説明板を参考としつつ、DEMに基づいて古代のパレルモを復原し、図8に示す。海に臨む河口であり、防御しやすい半島状の台地に立地することは、地中海沿岸の古代フェニキア都市、およびフェニキア植民都市に共通する特色を反映しているといえる。紀元前5世紀のペロポネソス戦争の中、前415～413年に行われたアテネのシチリア島への遠征に関連して、歴史家トゥーキュディデースは、シチリア島におけるフェニキア・カルタゴの植民都市の立地を「岬や島嶼」として特徴づけた。そして、ギリシア人の植民後も保たれた植民都市として、モテュア、ソロエイス、パレルモという、シチリア島西部の都市をあげ、これらの都市のアフリカのカルタゴとの近接性についても言及している。（久保正彰訳、下23頁）。現代のフェニキア・カルタゴ研究者も、フェニキアの都市およびフェニキア・カルタゴ植民都市の立地について、「沖の小島、半島、海に突き出した岬など」として地形上の特色を指摘している（マーコウ 2007, 86頁）。パレルモの歴史的な核も、この例に漏れないといえよう。

IV おわりに

都市の立地は、それを作った人々の文化を反映しているといえる。日本の平城京や

平安京は、三方を山に囲まれた盆地が地形上の立地の特色の特色であり、それは取り入れた中国の文化に基づく。また、同時期の大野城などの山城は、高句麗をはじめとする朝鮮半島の都城の立地にならったものである。本稿で取り上げたフェニキア植民都市としてのパレルモは、フェニキア・カルタゴの文化に基づいて、海に面した半島状の台地に立地した。地中海を舞台に交錯したギリシア、フェニキア・カルタゴ、ローマなどの文化も、その特色が都市の立地や規模、平面形などに表れているといえるのではなかろうか。

【謝辞】2017年8月の調査に先立ち、フェニキア・カルタゴ史をご専門とする佐藤育子氏（日本女子大学 学術研究員）に、パレルモの大聖堂司教館中庭遺構などについての貴重な情報を賜りました。ここに記して謝意を表します。

【文献表】

ヘロドトス（松平千秋訳）1972.『歴史（上・中・下）』岩波書店（岩波文庫）.

トゥーキュディデース（久保正彰訳）1966-1967.『戦史（上・中・下）』岩波書店（岩波文庫）.

グレン・E・マーコウ（片山陽子訳）2007.『フェニキア人』創元社, Glenn E. Markoe 2000. *Phoenicians*, University of California Press.

栗田伸子・佐藤育子 2009.『通商国家カルタゴ（興亡の世界史 03）』講談社.



図1 対象地域パレルモの WorldView-3 衛星画像。2017 年 4 月 11 日撮影。©DigitalGlobe



図2 パレルモ大聖堂司教館中庭にあるフェニキア時代の遺構。2017 年 8 月 23 日撮影。ピア・アンド・ラブル法による建物が見える。



図3 パレルモ大聖堂司教館中庭にあるフェニキア時代の遺構。2017 年 8 月 23 日撮影。街路側溝らしいものが見える。



図4 パレルモ中心部の WorldView-3 衛星画像。大聖堂司教館中庭のフェニキア時代遺構の位置を示した。©DigitalGlobe



図5 カルタゴ・ビュルサの丘（チュニジア）のカルタゴ時代の遺構。2009年11月14日撮影。ピア・アンド・ラブル法による建物が見える。



図6 チュブルボ・マジウス（チュニジア）遺跡。2009年11月18日撮影。ピア・アンド・ラブル法による建物が見える。



図7 地球観測衛星 ALOS「だいち」の観測に基づく数値標高モデル《ALOS World 3D - 30m》で描くパレルモの地形。

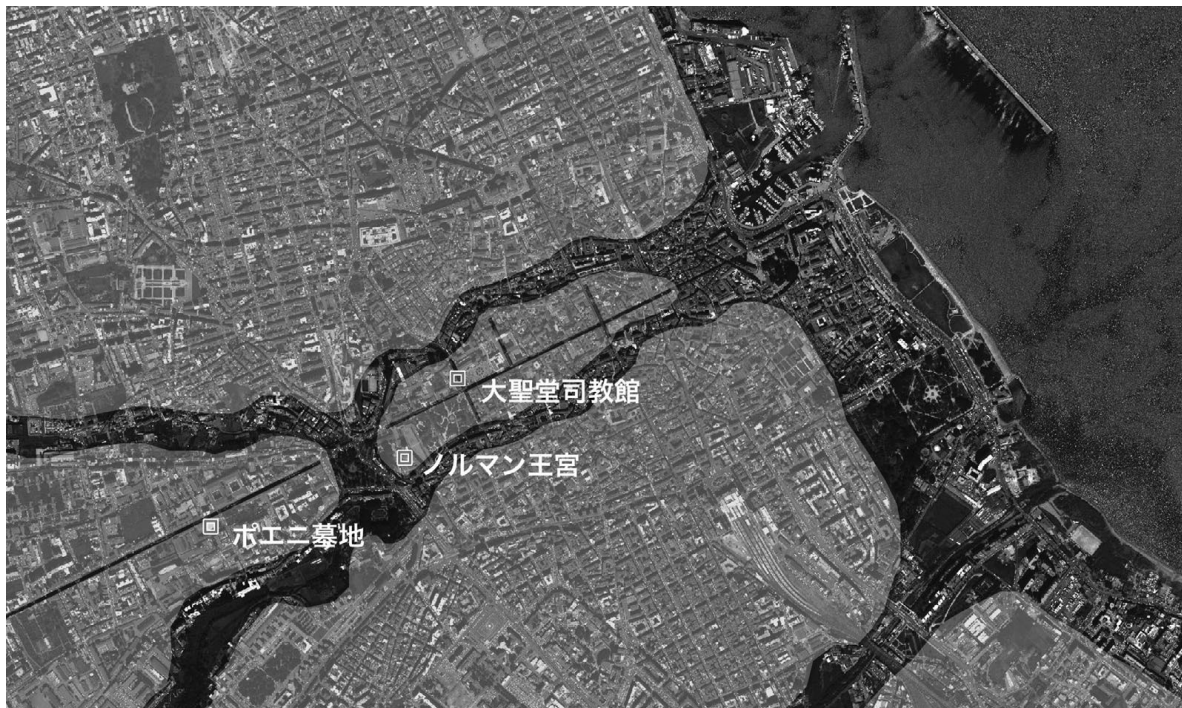


図8 数値標高モデルと衛星画像の判読から描いた古代パレルモのプランの復原。